

2. 大きな希望をもつて

長谷村長谷中学校二年 S・M

「皆さん、色々お世話になりました……」

ああ、きょうも又一人減った。もともとから数少ない私達の学校で、毎日のように送別会が聞かれた。涙を流して私達に別れを告げる人達は皆、集中豪雨で家を流されたり、危険な状態にある人達だった。

あの悲しかった時から二年余り。けれどもあの時の悲しさ、恐ろしさは、忘れることのできない思い出となつてしまつた。

昭和三十六年六月二十七日、強風、大雨のため、授業は半日で、皆集団下校した。町に出る二本の道さえも、山くず水や、堤防が切れて、交通が防げられバスも通らなくなつてしまつた。学校の近くにある私の家でさえ、歩いて帰るのがやっとだった。

歸ると家中で相談していた。もし、水が来たらどうしようということだった。その夜は普通どおり九時頃に床に着いたものの、何かおかねかたかたかたかた。十時少しすぎ頃だったろうか。

「S、起きろ！」

という姉の声が目がさめた。さっきまで降っていた雨も、もうすっかりやんでしまっていた。起きてみるに、家には、おばあちゃん、姉と、私、そして、何も知らないでぐっすりとおもっている妹だけだった。父も母も川の線が変ったと言った、どこかへ行ってしまったようだった。有線は、

「早く避難して下さい。早く避難して下さい。」

とアナウンサーも大おおわて。火の見やぐらでは、ジャンジャン鐘をたたいて水が来るのを知らせていた。なにがなんでもかわからないまま、二階や高い所に色々の物を運び上げた。からだはカタカタ震えた。時間がたつにつれて

「おーい、おーい」

という声や、

「水が来るぞ。」

という消防団や村の人達の声で、昼間より騒しかった。家の中はまるでがらんとしていた。いつもとは変わった空気が流れていた。

どの位時間がたったのだろうか。やんばらと思つた雨も又前みたいになり降りはじめ、震えはいっそう増してきた。相変らず有線と鐘はなりどろし。二階の窓から顔を出して、外の様子を見ていると、母が走りながら、大声でさげんか。

「水が来たぞ。早く逃げろ。早く逃げろ。」と。
 何度も何度も、繰返しまさげんぞいた。頭の毛は雨にぬれて、ぺちやんとくっ
 ついていて、顔もどこにあるのかわからないようだった。あわてて小高い所に
 登って見たものの、なんだか落ち着いていらぬ、震えながら、少しさがって
 みた。と同時に、「ドォー」と大きな音をたてて、水が川のように家の方に
 進んできた。この時の恐ろしかった事、もうだめだと思っただけくらい。
 「水が来たあ。」とさげんぞ二階にいる祖母に知らせた。
 父と母は水を止めに行つていない。あの時、私はどんな事を考えたのだら
 うか。なにしろもう、何かに夢中で、いや何も考えないなかつたのかもしれな
 い。二階から、今できたばかりの川を見ていると、母が来て、
 「へえ（もう）水は来んぞ。」と聞いた。
 一時は安心したものの、姉と下へおりていって川を渡ろうとした所へ又、
 「ドゥー」と水がおしよせまきた。さいわい姉が手を引っぱっていきくれた
 おかげで、流されなくすんだが、はいていたがうりを、どこか流しましま
 った。あわてて玄関にはいって、はみたものの、玄関の中は、水が泥だかわか
 らないようなもの十五センチ位たまっていた。こんなことが何度か続いた。
 ようやく大通りに出たものの、大通りは、もはや通りではなかつた。大川とい
 つてもよい位の水がどうどうと流れてきた。まだ夜明け前の、薄暗い中を人々
 は手に手に、懐中電燈を持って、障子戸やこたつやぐらの流れくる川を、母に
 だつてもう何も言えないで、障子戸やこたつやぐらの流れくる川を、母にし

がみついて見ていた。相変らず震えは止まらない。

ようやく夜が明けるところには、あたりは静まりかえり、昨夜あんなに恐ろしい事があったとは思えなかつた。学校も休みとなり、私たちは家々の、片づけの手伝いをした。もうたいじょうぶという人々の声を、信じられなかつたけれども、信じても、高い所から、荷物をおろしたり、家の中や、庭の土を除いたりした。一睡もしなかつたが、疲れはいっこうに出ず、片づけに働んでいた。朝も昼もない。御飯だつて食べたかどうかわからない。二十八日の昼近く、また片づけは終つていなかつた。少し小雨模様で荷物も少しずつぬれまいた。時間がたつにつれ、村々が騒がしくなり、最後には又、鐘をたたいたり、有線が鳴りひびくようになった。せっかく下におろした荷物をまた上にあげた。昨晚の恐ろしさは、部落の人たちは皆経験したらしかつた。それより、経験せざるをえなかつた。二日ばかりの間に、二度も三度も荷物の上で下げを繰返して来た。それといっしょに、

「もうたいじょうぶだ。」

という声が信じられなくなつてしまつた。

それから何日かたつた日、どの部落も町との交通が大水で妨げられしまつたので、ヘリコプターで町から米などを運び配るようになった。私達の部落は、まだ残つていた堤防に、ヘリコプターが米や、衣類や、毛布などを置いていくつてくれた。しかし、遠方の部落は谷あいでも、ヘリコプターが、おりるような広い場所はないので、直接ヘリコプターから、下で待つている人達に、色々

の物をあらしめてやったぞうだ。ヘリコプターの何日かの活動で、かり橋もでき、よりやく車も動き始めてきたものの、部落で一番被害の大きかった場所を見に行くと、向い側に、橋を失って、四方八方どこにも行く場所がなく、家を流してしまいい、荷物は何も持ち出せられなかった一家がいた。ちようど私達が行くとき、消防団の人達が、むすびを投げまくっている所だった。その姿を見たら、涙が本よりな、ぞして、水というものが憎らしい感じだった。はいだった。初めて知らない土地へ来たようなら、夢にも思っていなかった、すさまじいまわりのありさま、水だか泥だかわからないようなら、山という山は、青い所はほとんどなく、皆土色に。泥や石や砂が二階にまでたつするようにはいっばいはいっつゝ、家だかなんだかわからない家がいくつもあった。こんな姿を見ても、

「ああよかった。自分の家はこんなでなくま。」
 という気持がほんとうだった。がその反面、こわらの人達は、今後どのような暮していくのだらうかという心配もあった。

あの時から二年余り。今までに、あの時の事を忘れた人があるだらうか。校庭でボールと精いっぱい遊んでいる、いくつものかたまり。教室では、先生とにらめっこして勉強に働んだり、色々の面で中学生として一生懸命やっまっている私達だ。

あの時、物一つもち出せなくま、家ごと大水にさらわれまいった大勢の人達、どの人達だったかもうすっかり立ち直り、私と同じように、広い世の中へ飛び立とうとしてしまっているのだ。

今、中学校は統合され、隣の村まで、バス通学している。朝六時頃おきて、停留所まで二時間近く歩いている。バスに乗って通学している人達もある。この村の中学生は、何に對しても身付ない心を持ってゐるのだらう。そして、広い世界へ飛び立って行くために、今、一生懸命、色々の訓練をしているのだ。努力すれば何でもできるのだ。兼中豪雨の時だつて一人も犠牲者がなくすんだのも、ふだんの行いがよかつたからかもしれない。

校庭で村の美しい空気を胸いっぱい吸って、大きな希望をもらつて、広い世界に飛び立っていきたい。

(三十八年)